

三宝寺本『選択本願念仏集』と広本

緒言

院政後期に浄土宗を立てた法然房源空（長承二年〔1133〕～建暦二年〔1212〕）は建久九年（1198）、九条兼実の懇請に応じて主著『選択本願念仏集』（以下、『選択集』と略す）を撰述した。本稿では、学界未知の古写本である三宝寺旧蔵『選択集』（以下、『三宝寺本』と称す）を紹介するとともに、これを利用して広本（後述）について考察したい。

第一項 三宝寺本略解題

三宝寺本は、付属品の値札によれば、東京神田末広町の集古書房が古書籍展覧会に二円五十銭で出品し、徳富蘇峰が購入したものだという。裏表紙見返しに、大正五年（1916）十月廿五日付の鉛筆書きと同月廿七日付の蘇峰識語がある。恐らく蘇峰は、廿五日に入手してその成實堂文庫に収蔵し、二日後の廿七日に識語を書いたのであろう。

同本を、昭和七年（1932）の蘇峰先生古稀祝賀記念刊行会編（長沢規矩也・川瀬一馬解題）『成實堂善本書目』（民友社。以下、『旧書目』と称す）と四十二年の『国書総目録』第五卷（岩波書店）、そして平成四年（1992）の川瀬一馬編『新修成實堂文庫善本書目』（石川文化事業財団お茶の水図書館。以下、『新書目』と称す）はそれぞれ次の如く著録している。なお『国書総目録』の所謂「茶図」は、蘇峰から成實堂文庫を一括購入した石川武美の創設した、お茶の水図書館（現在の石川武美記念図書館）の略称である。

選択本願念仏集 二卷 釈源空撰 一冊

三宝寺本『選択本願念仏集』と広本

森 新之介

室町初期写本。八行十八字両面書写。「金映山三宝寺」印記あり。

選択本願念仏集 〔…〕茶図^{成實}（室町初期写二卷一冊）

（『旧書目』、一〇九頁）

選択本願念仏集 二卷 一冊

（『国書総目録』、二二七頁）

室町末期写。美濃小本。每半葉八行付訓書写。卷首に「金映山三宝寺」黒印記あり。褐色古表紙補添。卷末に蘇峰手識あり。三宝寺は京都花園村鳴滝、正保年中日護上人開基、上人造仏像有名の由を記す。

三宝寺本はこれら三書目以外で言及されていないらしく、^①学界未知と言つてよいであろう。

鎌倉初期に成立して草稿本である廬山寺本なども現存している『選択集』の伝本として、室町時代書写の三宝寺本は最古級でないが、黙過されるべきほどに新しいものでない。殊に写本としては、廬山寺本と往生院本、禿庵文庫本に次いで古い。これまで三宝寺本が全く注目されずにきた理由としては、同本を現蔵する成實堂文庫が浄土学研究者によつて殆ど利用されていないことや、同本が浄土宗や真宗でなく日蓮宗の寺院に襲蔵されていたことなどが考えられる。三書目の解題と幾らか重複することになるものの、稿者が実見調査によつて得た三宝寺本の書誌などを整理すれば次の如し。

一、蔵者…金映山三宝寺旧蔵、石川武美記念図書館成實堂文庫現蔵。
一、員数…一巻一冊（本末合冊）。

一、法量…天地二四・〇厘、左右一七・〇厘。

一、装幀：四針眼線装。ただし、片面書写袋綴でなく両面書写。褐色の古く細い綴じ糸は断裂しており、白色の新しくやや太い綴じ糸で補綴されている。

一、表紙：表裏ともに褐色古表紙。表表紙の右上に楷体墨書「縁」あり、中央に草体朱書「尊」あり、これら二字は江戸時代のものか。楷体墨書「縁」の右上に細く微かに墨書一字あり、判読困難ながらやはり「縁」らしく見え、これはより古いものか。裏表紙の右下に天地逆転した墨書「決疑抄直牒」が微かに見える。『決疑抄直牒』を解体し、表紙の表裏と天地を逆転させて再利用したのであろう。裏表紙の中央にも朱書一字あり、これを天地逆転させたものが表表紙の草体朱書「尊」のように見えるが、朱色が薄れており判読困難。

一、紙数：九十八丁（本四十六丁、末五十二丁）、丁付なし。

一、題号：外題なし。首題「選択本願念仏集^本」（二オ）、同「選択本願念仏集^末」（四七オ）、尾題「選択本願念仏集」（九八オ）、小口題「浄土選択集上下」あり。

一、本文：無辺無界。半丁八行、一行十八字（稀に十七字や十九字、廿字の行あり）。本文すべて一筆。墨筆の付訓や訓点もまた多く書写者によるもの、僅かにある朱点も同じか。ただし、やや太く荒い異筆の書き入れも僅かにあり。

一、状態：完存。虫損あるも、判別不能の文字なし。

一、印記：双郭豎二行陰陽刻朱印記「徳富氏珍藏記」（一オ右下。『新書目』天然色口絵一頁所載『秘府略』巻第八百六十四巻首書影参照）、双郭豎二行陽刻墨印記「金映山貳寶寺」（二オ右下、四七オ右下）あり。

一、奥書：なし。

一、識語：裏表紙見返しに、旧蔵者の蘇峰による大正五年（1916）十月廿七日付のものあり。『新書目』の言う如く、三宝寺の所在が京都鳴滝であることや、同寺開山の日護が造像で著名であることを書き記す。

なお三宝寺本は、印記が第二丁表の首題「選択本願念仏集^本」の下だけでなく、第四十七丁表の首題「選択本願念仏集^末」の下にも捺されている。表表紙見返しと第一丁、そして第四十六丁と第四十七丁では虫損の位置が大きく異なり、第一丁は地の喉にやや角潰れがあるが表表紙見返しは地の喉にそれがない。しかも喉の余白が非常に狭く、第七十八丁表第一行右傍の小書一字などは読み難くなっている。恐らく原態は粘葉装二帖本であり、寛永六年（1629）建立

の三宝寺⁽²⁾への移蔵後に二帖それぞれに捺印され、後に線装一冊本に改められたのであろう。

第二項 三宝寺本の員数

前項所掲の三書目はすべて三宝寺本を二巻一冊としている。「選択本願念仏集^本」（二オ）と「選択本願念仏集^末」（四七オ）という二つの首題があるからであるが、同本を本末二巻と数えることは誤りだと言つてよい。

源空死没前々月の建暦元年（1211）十一月付で弟子の平基親が作った「新雕選択本願念仏集序」⁽³⁾（法然院蔵「選択集」延応版表表紙見返し所載）は、「空上人有^三一軸文集之書、号^二「選択本願念仏集」^一」としており、当時の「選択集」が一巻本であつたことは疑いない。嘉禎三年（1237）成立の正信房湛空『四巻伝』こと「伝法絵流通」巻第二も、画中詞で「権律師^{降寛}小松殿^二参向の時、上人御堂の後戸^二出対給て、一巻の書を持て隆律師の胸間^二指入。依^三月輪殿之仰^一所^レ撰「撰択集」也」（五二頁）とする。以後も、日蓮『守護国家論』（正嘉三年「1259」成立か）に「中昔有^レ邪智上人、為^二末代愚人^一破^二一切宗義、造^二「撰択集」^一、一卷」（八九頁）とあり、浄土宗九品寺流祖の覚明房長西『浄土依憑経論章疏目録』集義録第四（嘉禄元年「1225」）文永三年「66」成立に「撰択念仏集」一巻、同「黒谷上人」…引用者註」（二一オ）とあるなど、概ね鎌倉時代において「撰択集」は一巻と数えられていた。⁽⁴⁾

しかし、鎌倉末期に西山流本山派祖の康空示導が流祖の善恵房証空に仮託して偽作したらしい『撰択密要決』⁽⁵⁾巻第五「静以善導観経疏者已下事」は、源信『往生要集』と源空『撰択集』について「往生要集」三巻、各分^二本末^一二六帖。「撰択本願念仏集」一巻、分^二本末^一二巻。已上八巻、是云^二「浄土本疏」^一（二七オ）としており、当時「撰択集」一巻は本末に分けて二巻と数えるようになっていたようである。南北朝時代の康永三年（1344）、日蓮宗の浄行院日祐『本尊聖教録』第十七箱「大徳要文等」は「撰択」上下二「帖」…引用者註」と著録した。ただし、十八年後の康安二年（1362）、大谷流の存覚光玄『浄典目録』は「撰択集」一巻（本末二帖）黒谷先徳御作^{源空上人}と著録しており、「撰択集」は本末に分帖されているものの一巻だと理解していたらしい。

また、浄土宗白旗流の西誉聖聡『浄土三国仏祖伝集』巻下（応永廿三年「141

6成立は「第五祖本朝浄土宗元祖法然上人者、〔…〕製作〔…〕『選択集』二卷、〔…〕」(三三八頁)としており、当時は二巻説が主流になっていたのである。この問題について、聖聡の説を弟子の了暁慶善が記したらしい『直牒見聞』巻上に次の或問が見える。

問、「『選択』者、本一卷、文歟、又上人ヨリ本末二巻、二分ル文歟」。答、本ト一卷也。開三印判時、後ニ部巻多キ故ニ為ニ調卷、発三刑木ニ次ニ分レ之ヲ也。

(二オ)

『選択集』は本来一卷だったが、これを開版する時、紙数が多くなるため版本を起こした後で二分された、と。

最初の刊本である建暦二年(1212)版は亡佚しており、これが一帖本であつたか二帖本であつたかは知り得ない。しかし、その廿五年後に開版された延応元年(1237)版は現存しており、粘葉装二帖本である。『直牒見聞』の言う如く、建暦版か延応版によつて分帖されたのであろう。

延応版は毎半丁六行十七字詰めであり、十六章の前八章を収める本帖は第七十八丁裏の第六行で終わっており、空行がない。そして後八章を収める末帖は、首題などなく第九章の章題「念仏行者可レ行用四修法之文」を第一丁表の第一行として始まる。想像するに、当初は前後八章ずつで二分しない十六章一帖本として雕版したが、そのまま一帖本として装幀すれば紙数が余りに多くなつてしまい不便だと考え、図らずも第八章が第七十八丁裏の末行で終わり次章が次丁表の初行から始まっていることを幸いとし、『直牒見聞』の言う如く前後八章ずつの二帖本として装幀した、ということは有り得よう。

このような本末二帖本の普及により、『選択集』は一卷でなく本末二巻だという誤解が生じたのであろう。そのため三宝寺本もまた、二巻一冊でなく一卷一冊とすべきである。

第三項 三宝寺本と広本

本稿で三宝寺本を紹介することにした最大の理由は、これが学界未知の古写本だということよりも、亡佚したとされてきた広本だということにある。

源空没後廿四年の嘉禎二年(1236)、遺弟の勢観房源智は『選択要決』⁽⁶⁾第十決で、当時存在していた『選択集』の広略二本についてこう説明した。

三宝寺本『選択本願念仏集』と広本

問、「於流布本、有広略異。其相違有何故」。答、略者、即是高覧本也。然執筆弟子為初心学者、後加名目。問、「就異本、其意別耶」。答、雖無幾別、非無少異。所詮不可如高覧本。(二五オ)

略本は兼実の高覧に供したもので、広本は執筆の弟子が初心学者のために名目を加えたものだ。二本は大同小異だが、高覧本こそが善本だ、と。

広本は鎌倉時代に広く流布したらしく、鎮西流の然阿良忠なども引用している。しかし徐々に読まれなくなつていき、何時からか亡佚したと考えられるようになった。江戸中期の元禄九年(1696)、同流の良照義山は開版した『選択集』の刊記で同書について稿刪正広の四本説を唱え、その「第四広本」について「不行于世」とした。また江戸後期の寛政二年(1790)、真宗江州大津西栄寺の惟謙致敬が開版した『選択集』の付録「異本目次」も、「広本」について「不行伝」(原割註)としていた。

広本研究の画期となつたのは、大正二年(1913)の鷲尾教導「選択集広本に就て」(『六条学報』一三〇)による覚善本(龍谷大学図書館現蔵、請求記号「二一・一五四・四」、通称「存覚相伝本」「存覚本」)の紹介である。同本は延文元年(1356)に存覚から相伝したとの覚善識語がある延べ書き本で、原六帖だったに違いないが本上中下と末上の四帖のみが残存する零本である。その和訳された本文は流布本と異なり広本佚文と符合するため、広本の延べ書き本だと考えられている。

この覚善本は貴重な史料であるが、少なくとも四つの問題がある。第一に、前四帖前九章のみが残存し後二帖後七章が残欠している。第二に、漢文が和文に延べ書きされている。第三に、親鸞流に訓読されている。そして第四に、「観経疏」を「観経義」に作り、「現在世成仏」の「世」を脱するなど、一部の語彙が親鸞流に改変されている。そのため、覚善本によつて広本の旧貌を復元することは難しく、紹介者の鷲尾も同稿で「広本」の真を伝へるに多少の遺憾はある」(三四頁)と惜しんでいた。

覚善本の紹介後も、広本研究はさほど進まなかった。それは同本が閲覧困難だつただけでなく、零本であり悪本であり、しかも和訳されているため広本そのものと称し難い、という史料の制約が依然として大きかつたからであろう。紹介から九年後の大正十一年、藤堂祐範は「広本は早く其伝を失ひ、後世之を

見ること能はざるに至れり⁽⁹⁾と述べ、近くは平成廿三年(2011)、安達俊英が「広本」そのものは現存しない⁽¹⁰⁾と解説していた。

稿者はこれまで、平成廿七年の論文で広本に論及して以来、広本への関心を維持してきた。また数年来、春本龍彬や井上慶淳、下端啓介が広本などについて研究し、論文を発表している⁽¹¹⁾。ただし、一昨年に井上が「現存唯一の広本と考えられているのが、〔…〕存覚本である。〔…〕このほかには広本と考えられる写本が現存しない」と述べたように、これら直近の研究でも広本は亡佚したとされてきたため実見できず、稿者たちは不十分な佚文などに依拠するしかなかった。

本稿で紹介する三宝寺本は、亡佚したと久しく考えられてきた広本の足本である。その本文が、後述の例外を除いて広本の佚文と一致するため、そう断言できる。

なお、三宝寺本には僅かながら異文註記があり、それもまた貴重である。例えば、略本が「准_レ上_レ思_レ之」(延応版本帖五才に作る第一章私釈の四字について、一方で良忠『選択伝弘決疑鈔』巻第一「私云窃計等事」(建長六年「1254」)弘安十年「87」成立。以下、『決疑鈔』と略す)は「広本云、「准_レ大思_レ之」(三七才)とし、他方で西山流深草派の善偉堯恵『選択私集鈔』巻第一「次小乗者摠是経律論等事」(至徳四年「1387」前後成立。以下、『私集鈔』と略す)は「広本云、「准_レ大思_レ小_レ」云_二(二〇ウ)として_一いる。このように二つの広本佚文四字は、同じく第二字を「大」に作るものの、第四字を「之」に作るか「小」に作るかで異なっている。三宝寺本での当該四字(三ウ_二四才)は『私集鈔』所引佚文と一致し、その第四字の右傍に異文註記二字が小書されており、『決疑鈔』所引佚文と一致する異本もあつたらしい。この異文註記は三宝寺本の書写者が異本を実見して施したのか、そもそも親本に施されていたものを転写しただけなのかは明らかでないが、何れにせよ広本の伝本にも複数の系統があつたことを裏付けられる。

第四項 伝正中版と広本

三宝寺本には奥書がなく、親本について明記されていない。しかしその親本は、五島美術館大東急記念文庫に末帖のみが現蔵される零本の伝正中版(函架

番号「三五・六一・一〇八一」)か、同版に極めて近い本であつたに違いない。三宝寺本との関係については次項で考証することとし、本項では伝正中版とその広本との関係について略述する。

伝正中版は無刊記本であり、末帖の裏表紙見返しに見える次の正中二年(1325)刊記は後補されたものである。

正中二年十月 日

比丘了延 刻

大正十一年(1922)に同本を紹介した藤堂は、「此の刊記は本文の書体の如く優秀ならず、又墨色粗悪なり」とし、また金勝山淨嚴院蔵の古刊本『阿弥陀経』にも同一の後補刊記があることを指摘して、「考ふるに、比丘了延は「正中二年十月 日比丘了延 刻」の印判を所持し居りて、在来の諸本に捺印せしものと想像せらる、〔…〕然らば此の版本は正中二年以前の出版と見るべきなり」と述べた⁽¹³⁾。そのため、本稿ではこれを「伝正中版」と称する。

そして藤堂は、斯くも述べた。

此の版は各種の版本中最も特徴を備へたるものにして、他本には下冊に首題なきに、此の本には之を置き。又他本は第九四修章より下冊とせるに此の本のみは第八三心章より下冊とせり。又他本は皆普通の写経と同様一行十七字詰なるに、此の本に限り十八字詰となれり。又〔…〕異点頗る多し。〔…〕又斯版の特徴として三心章より末として分冊せることは、他版に見ざる処にして、唯だ龍谷大学所蔵の延書広本〔覺善本…引用者註〕独りこの特徴あり。大に研究の価値あるものなり⁽¹⁴⁾。

後に仏教大学総合研究所「法然浄土教の総合的研究」研究班が伝正中版を影印すると、その解題で兼岩和広も同版と広本との関係について斯く述べた。

正中年間の刊記を記す『選択集』は「第八三心章」より後を末巻として印行されているのである。「第八章」より後を末巻とする形態を持つものは

他に仮名書き写本『選択集』(龍谷大学蔵、存覚相伝本)が現存しているが、

この写本は「広本」として扱われているものであり、現にその本文中には他本に見られない多くの補文が記されているのである。〔…〕この正中版の前半部分(本巻)には現存「広本」の如きの文章の増補が見られた可能性は十分に考えられる所である。〔…〕この正中版の研究次第では『選択集』

研究史上、全く新たな見解を見出すことができると考えられ、大いに研究の価値のある重要資料である。^⑮

これら藤堂と兼岩の提言以後も、伝正中版と広本との関係についてはさほど注意されずにきた。それは恐らく、伝正中版に寿観二経説示前後論（以下、「二経前後論」と略す）が見えないからであつたろう。

二経前後論とは、草稿本の廬山寺本『選択集』第十二章の私釈で展開された、釈迦が『無量寿経』と『観無量寿経』の二経を説示した順序についての議論である。廬山寺本でこの五百数十字は野で囲まれ見せ消ちされており、延応版や往生院本などの略本諸本には存在しない。しかし、良忠『浄土宗要集』巻第五第廿三「三経説時前後如何」（弘安五年「1282」同九年「86」成立か）は「広選択」云（二三ウ）として、廬山寺本とほぼ同文の二経前後論を引用している。そのため先行研究は、広本の第十二章私釈にも二経前後論があるに違いなく、同論のない伝正中版は広本でないと考えてきたのであろう。

ただし次の如く、第十六章私釈の諸本が「弥陀」に作る二箇所を伝正中版は「釈迦」に作る。

就中毎夜夢中有僧、指授玄義。僧者恐是弥陀、応現。爾者可謂、此疏是弥陀、伝説。何況大唐相伝云、「善導是弥陀化身也」。

（延応版末帖五〇ウ一オ）

就中毎夜夢中有僧、指授玄義。僧者恐是釈迦、応現。爾者可謂、此疏者是釈迦伝説。或復大唐相伝云、「善導是弥陀化身也」。（伝正中版六七オウ）^⑯
そして春本が指摘したように、鎮西流白旗派の了誉聖阿『伝通記糅鈔』巻第四十八「本曰窃以（乃至）経法而已等事」（応永二年「1395」成立）は良忠『観経散善義伝通記』巻第三の「常有二僧」等者、『選択集』云、「僧者恐是弥陀、応現也」（三九ウ）を釈して、「今順『選択集』義故云「弥陀」若依広本「応云「釈迦」」（四三オ）としており、『選択集』の「僧者恐是弥陀、応現」の「弥陀」を広本は「釈迦」に作るという。^⑰そのため、伝正中版には広本の佚文と一致する箇所もある。

第五項 三宝寺本と伝正中版

三宝寺本の親本が伝正中版かそれに極めて近い本だったと考えるべき理由

三宝寺本『選択本願念仏集』と広本

は、大別して少なくとも五つある。

第一に、伝正中版は半丁六行で三宝寺本は半丁八行であり行詰めが異なるものの、ともに概ね毎行十八字であり字詰めが同じである。しかも三宝寺本が十八字詰めであるのは偶然でなく、親本もまたそうだったからだと考えられる。例えば、私釈であるため一格低書されている三宝寺本の第七丁表の文字配列を千字文で示せば、次の如くである。

天地玄黄 宇宙洪荒 日月盈昃 辰宿列张 寒来暑往 秋收冬藏 閏餘成歲 律召調陽 雲騰致雨 露結為霜 金生麗水 玉出崑岡 劍号巨闕 珠称夜光 果珍李奈 菜重薑海 鹹河淡鱗 潜羽翔龍 師火帝鳥 官人皇始 制文字乃服 衣裳推位讓國 有虞陶唐 弔民伐罪 周發殷湯 坐朝問道 垂拱平章 愛育黎首 臣伏戎羌 遐邇邇壹 体率寶婦 王鳴鳳在 樹白駒食場

注意すべきは、第四行の脱字（芥）が小圈点と右傍小書によって補われていることと、同行の末字（淡）が二格に跨りやや縦長にして書写されていることである。書写者は、同行第十六字（河）を書写した直後に第十二字（芥）を脱していたことを察し、第十一字（重）の下に小圈点を施し右傍に小書して脱字を補ったに違いない。では何故、書写者は同行末の二格に二字（淡鱗）を書写せず敢えて一字（淡）だけを書写し、次の字（鱗）を同行末でなく次行頭に書写したのか。これは恐らく、親本が十八字詰めでは一定していたため、書写時にこれを踏襲しようとしたのであろう。

十七字詰めであれ十八字詰めであれ、親本の字詰めがほぼ一定していれば、これを踏襲することによって脱字を自ら察することが容易になる。三宝寺本は第七丁表第四行以外でも、第十五丁裏第五行や第七十八丁表第一行で、脱字を小圈点と右傍小書によって補い行末の一字を二格に跨らせている。また第七十七丁表の一格低書された私釈では、第六行を行末まで書写した直後に誤って二字を衍してしまったことを察したらしく、その二字（第十一、第十二字）を見せ消し、次の第七行では字間を詰めて二字多い十九字を書写して配字の過多を解消している。これらのことは、その親本が原則として十八字詰めであったこ

とを暗示している。

第二に、伝正中版には多くの特徴があり、それらは三宝寺本と概ね一致する。例えば、前述の如く延応版などは十六章を第八章までと第九章から二分しているが、伝正中版は第八章から末帖とし、しかも第二丁表は同章の章題「念仏行者必可具足三心之文」の前に低書なしの首題があつて、

選択本願念仏集^末

念仏行者必可具足三心之文

となつている。三宝寺本もこれと同じである(四七オ)。

第三に、伝正中版には特異な字句があり、それらが三宝寺本と一致する⁽¹⁸⁾。例えば、前項で紹介した伝正中版が「弥陀」でなく「釈迦」に作る箇所も、三宝寺本は同じく作っている。

第四に、伝正中版と三宝寺本では形譌字の一致が多く見える。最も顕著な例として、第八章所引の善導『観経疏』巻第四散善義に「若有後仏出世、豈可改前十善令行十惡也」という一文があり、この「改」を延応版(末帖六七オ)などは正しく作り、伝正中版は譌つて「政」に作る(八ウ)。三宝寺本もこれと同じ形譌字に作り、その左傍に親本もまた此くの如しという意味の四字を小書している(五三オ)。それ以外にも、伝正中版は「須臾」(延応版本帖七三オ)を譌つて「須更」(四ウ)に作り、「瞋憎」(延応版本帖七三ウ)を譌つて「瞋増」(二五オ)に作り、「法常住経」(延応版本帖三オ)を譌つて「法常住経」(四〇ウ)に作っており、三宝寺本もこれらと同じ形譌字に作っている(五七ウ、五八オ、七六ウ)。

そして第五に、伝正中版と三宝寺本では異体字の一致もまた多く見える。例えば、第九章「念仏行者可修行用四修法之文」は当然ながら四修への言及が多く、伝正中版では「修」と「脩」が次の如く混在している。

念仏行者可四行用修、法之文

善導往生礼讃云又勸行四修、法何者為四一
者恭敬修、所謂恭敬礼拝彼仏及彼一切聖衆

(二一〇オ)

等故名恭敬修、畢命為期誓不中止即是長時
修、三者无餘修、所謂専称彼仏名専念專想専
礼讃彼仏及一切聖衆等不雜餘業故名无餘

脩、畢命為期誓不中止即是長時脩、四者无間
脩、所謂相統恭敬礼拝称名讚歎憶念觀察廻
向發願心心相統不以餘業來間故名无間脩
又不以貪嗔煩惱來間隨犯隨懺不隔念隔時
隔日常使清淨亦名无間修、畢命為期誓不中
止即長時修、

(二一〇オ)

この章題と引文で、伝正中版が「修」に作る九箇所は三宝寺本も同じく作り、伝正中版が「脩」に作る三箇所は三宝寺本も同じく作っている(六一ウ、二オ)。また、伝正中版は「不隔念隔時隔日」の三つの「隔」の前二者の右旁を「聶」の異体に作り、後二者の右旁を「隔」の異体に作っており、三宝寺本もそれぞれ同じく作っている。

ただし、伝正中版が三宝寺本の親本だと推定することを妨げる箇所もある。

第一に、三宝寺本は原則として十八字詰めであるが、字詰めが十九字以上の行や十七字の行も散見する(以下、それぞれ「長行」「短行」と称す)。他方、伝正中版は長行が四箇所八行(八ウ第二、第六行、一七ウ第三行、一二オ第二行、五一ウ第一行)にあるものの、短行はない。しかも、伝正中版の長行箇所が三宝寺本のそれと一致しない。

第二に、伝正中版は十六章私釈の「静以」の前に改行がなく文が連続している(六七オ)が、三宝寺本では改行がある(九六ウ)。

三宝寺本の親本は、これらの不審もあるためたとえ伝正中版でないとしても、同版に極めて近い本だったことは動かないであろう。

第六項 広本の作者

第三項で見た如く、嘉禎二年(一二三六)に源智『選択要決』は、執筆の弟子が初心学者のために後に名目を加えて広本を作ったと述べた。

それから約五十年後の至徳四年(一三八七)前後、堯恵『私集鈔』巻第八「埋于壁底者」は「有『選択』広略二本」也。略本今本也、即高覧本也。広本、真観、房、後日為初心者聊加勸文。広略二本中、縦有参差事、専可依略本二者也(二四ウ)とし、初心者のために略本を増広して広本を作った者は源空高弟の真観房感西(仁平三年「一一五三」)正治二年「一二〇〇」だとした。稿者も五

年前に旧稿¹⁹でそう考えたが、再考するに、『選択集』を執筆し後に広本を作った源空弟子とは感西でなく安樂房遵西（未詳）建永二年（1207）であろう。

『選択集』執筆の任を務めた弟子は、諸伝の記事や廬山寺本の筆跡によって、遵西と感西、証空の三人に比定されている。²⁰しかし鎌倉室町時代には、『選択集』を執筆した弟子は感西一人だけだという誤伝もあった。聖岡『決疑鈔直牒』巻第七「私問曰上輩文中等事下」（応永三年「1396」成立）が問題としたように、良忠も『決疑鈔』巻第三で執筆の弟子として感西の名だけを挙げていた。堯恵『私集鈔』が広本の作者を感西としたのは、執筆弟子は感西以外にいなかったという誤解によるものであろう。先行研究では唯一、約百年前に今岡達音が「予は後加名目の執筆人を以て安樂房と認むる者なり」と述べていたものの、その理由が「真観房は、〔…〕謙譲の人として上人〔源空〕引用者註」の御説に加筆するが如き行動を敢てせざる人なればなり」というやや薄弱なものであったためか、以後の研究史では継承されなかった。

良忠が上総国周東の在阿のために撰述した『決答授手印疑問鈔』（康元二年「1257」成立）の序は、同書巻上所載のものと性阿性心『授手印決答見聞』所載のもの二つがあり、本稿では両者をそれぞれ「旧序」と「新序」と称する。新序によれば、旧序は良忠が在阿の談を聞いて作ったもので、新序は良忠が後に石川道遍の談を聞いて添削したものだという。その新序は斯く伝える。

禪門〔道遍〕引用者註示云、「〔…〕。石垣住侶金光房、為所領沙汰之參鎌倉矣。付予〔道遍〕引用者註致訴訟之處、法然上人御門人安樂坊又下鎌倉矣。以『選択集』教化諸人之後、欲歸上都。予請云、「暫有逗留矣、蒙御教化者所望也」云。彼人云、「自非四五日延引者、難讀此集」。仍被誦誦之時、金光房為學者之間、亦請之為同聞衆、即領解并聞書等、同誦此人。〔…〕。」（八五頁）

鎌倉に來た石垣の金光房は、自分道遍に託して訴訟していた。そして当時は、鎌倉の諸人を『選択集』により教化していた遵西が帰洛する直前だった。自分道遍が、もう暫く逗留して自分にも教化してほしいと請うたところ、遵西は、同書を講ずるためには帰洛を四、五日延引しなければならない、と答えた。そこで所要日数短縮の便法として、自分道遍は學者である金光房に請うて遵西の同書講誦に同座させ、その領解や聞書などを書かせた、と。なお、旧序にもほ

ぼ同文があるものの、そちらでは『選択集』という書名が出されていない。

建永二年（1207）に斬首された遵西はそれ以前のある時期、師匠源空の埋壁の誠に背き、鎌倉で『選択集』を講読し諸人を教化していたらしい。同書を諸人に講読していたのであれば、自ら書写して他人に与えることもあったろう。その書写時に説明を加えたり表現を整えたりして鎌倉周辺で成立した別系統の『選択集』が、広本だったと考えられる。

先行研究では、今岡が広本の延べ書き零本である覚善本の写本に依拠して、「案ずるに広本選択集の中、文句の増加多きは、第一章第二章の下是れなり、爾余の諸章は文句の加減極めて少くして」云々と述べていた。覚善本は善本でなく足本でもなかったため、残欠している後二帖後七章に不同が少ないとの今岡説は推測の域を出ないものであった。しかし、善本にして足本である三宝寺本によって、第三章以降に略本との不同が少くないことを確認できた。そして遵西は、廬山寺本の第一章から第三章の過半までを執筆していた。遵西の執筆した箇所と不同の多い箇所とが大きく重なることは、偶然とは考え難い。

結語

以上本論では、学界未知の広本である三宝寺本を紹介し、その親本などについて考察した。同本が極めて貴重な史料であることは疑いなく、今後の研究で活用されていくことを期待したい。

註

本稿で用いた史料の書誌は次の如し。引用では適宜字体と句読点を改め、訓点や傍点、傍記、括弧、頁数を付し、改行を省いた。

法然院藏延應版『選択集』、義山募刻版『選択集』：大正大学浄土宗宗典研究会編『選択集』諸本の研究（資料編影印）（文化書院）。『四卷伝』：法然上人絵伝集成（浄土宗）。『守護国家論』：昭和定本日蓮聖人遺文（総本山身延久遠寺）。『浄土依憑經論章疏目錄』：小山正文「寛永二十一年本『浄土依憑經論章疏目錄』（『同朋大学論叢』六二、1990）。『選択密要決』（浄土三番箱）：西教寺正教藏蔵。『本尊聖教録』（祐師本尊聖教録）：中山法華經寺聖教殿所蔵日蓮聖人御真跡（法華經寺）。龍谷山本願寺蔵室町末期書写本『浄典目錄』：浄土真宗聖典全書（本願寺出版社）。『浄土三國仏祖伝集』：授手印決答見聞：正統浄土宗全書（山喜房仏書林）。『直牒見聞』：正保四年（1647）版。『選択要決』（請求記号「浄教寺二三」、永仁七年（1299）書写本『決疑鈔』（請求記号「〇九三・一

・二二）、寛永年間（1624～44）前後古活字版『観経散善義伝通記』（請求記号「〇九三・一・一三」）：仏教大学付属図書館蔵。『私集鈔』：享保元年（1716）版。『浄土宗要集』：慶安四年（1651）版。『伝通記釋鈔』：明暦元年（1655）版。『黒谷上人語燈録』：黒谷上人語燈録写本集成（浄土宗）。

（1）古写本『選択集』の書目としては、藤堂祐範編『選択集大観』（中外出版、1992）や同『選択集書誌』（『専修学報』三、1993）同『浄土教稀観書目第三』（『専修学報』九、1994）などがある。これらの後二者は『旧書目』より後に刊行されたが、三宝寺本を著録していない。

（2）三宝寺の建立年は、糸文守の中正院日護伝（寛永十八年「1641」成立）による。同伝は道友の文守が日護から許諾を得て生前に作ったものであり、信憑すべきである。日護と同伝については、宮崎英修『波木井南部氏事跡考』（『日蓮宗史研究』二）、孔官堂出版部、1950）参照。

（3）古典籍の員数単位の帖と冊の異同については、今日の書誌学でも定説がないようであり、本稿では山本信吉の「料紙を糊で貼り合わせた本を「帖」といい、糸で綴った本を「冊」と呼ぶ」という理解（『古典籍が語る——書物の文化史——」、八木書店、2004、七九頁）に従う。帖は粘に通じて糊付けを意味し、冊は簡冊の類の糸綴じを意味すると理解すれば、意よく通ずる。

（4）なお、文永十一年（1274）成立の望西楼了惠編『黒谷上人語燈録』は、巻第四、第五にそれぞれ「選択本願念仏集本」「選択本願念仏集末」を収録していたらしい。これは、了惠が本末二帖本を一帖ずつ収録したのか、それとも一帖本を本末に二分して収録したのか不明。

（5）『選択密要決』が示導により偽作されたいことについては、吉良潤・稲田順学・加藤義諦『三十八巻鈔』は本山義開祖康空示導の著』（『深草教学』九、1989）参照。

（6）『選択要決』の撰者や成立年については、拙稿『選択要決』撰者弁証』（『早稲田大学高等研究所紀要』一三、2021）参照。

（7）覚善識語については、日下無倫「親鸞聖人見写の選択集及びその延書」（『第二編第一章、初出1923』、平楽寺書店、1931、四二頁）参照。

（8）『観経義』については、井上慶淳「選択集」広本の基礎的研究——存覚相伝本の位置づけについて——」（『龍谷大学大学院文学研究科紀要』四五、2023、一四〇六頁）参照。『浄典目録』にも『観経義』四卷常二ハ疏ト云と著録されている。

（9）藤堂祐範「選択集之書史学的研究」、『選択集大観』（前掲）、三ウ。

（10）安達俊英「選択本願念仏集／選択集」、仏教大学総合研究所編『浄土教典籍目録』、仏教大学総合研究所、2011、三七五頁。

（11）春本龍彬「廬山寺蔵『選択集』と他本の関係」（『本篇第三章、初出2021』、『選択集の成立と展開——廬山寺本を中心に——』、法蔵館、2024）や井上慶淳「選択集」広本の研究——略本との成立前後について——」（『印度学仏教学研究』七〇、一、2021）、下端啓介「法然『無量寿経釈』の「古層」の検討——「前・」後」

の指示語に注目して——」（『仏教大学仏教学会紀要』二八、2023）など参照。

（12）井上慶淳「選択集」広本の基礎的研究」（前掲）、一頁。

（13）藤堂祐範「選択集之書史学的研究」（前掲）、五ウ。ただし、稿者が伝正中版を実見したところ、本文と刊記で墨色の明らかな異なりは認め難かった。了延が願主となつて『選択集』や『阿弥陀経』を開版させ、それらの大尾に刊記を捺した、ということには有り得ないであろう。

藤堂は伝正中版の開版時期を、「選択集之書史学的研究」では「所謂建武中興時代復古の気風起りし時」（五ウ）としていたが、八年後の『浄土教版の研究』（大東出版社、1930）では「鎌倉の中期もしくはそれ以前」（九七頁）とし、六年後の『選択集書誌』（前掲）では「正中以前鎌倉初期頃」（一四頁）とした。また近年、春本龍彬は伝正中版を鎌倉前期の建暦版に比定した（『廬山寺蔵『選択集』と他本の関係』前掲、三七六～七頁）。しかし、末帖に首題「選択本願念仏集末」を置いた伝正中版のような『選択集』が開版されたのは、鎌倉前中期でなく後期以降であろう（本論第二項参照）。

伝正中版には印記や識語がなく、江戸時代以前の来歴は不明である。ただし、西村兼文『古梓一覽』（明治十五年「1882」自跋）に正中二年十月日付比丘了延刊記のある『安楽集』と『選択集』が著録されている。西村は嘗て東寺校倉に入つて得た知見も用いて同書を編んだというため、あるいは伝正中版も東寺校倉に蔵されていたのかも知れない。同版が後に久原文庫や京都帝国大学古梓堂文庫を経て大東急記念文庫の蔵に帰したことについては、春本龍彬「廬山寺蔵『選択集』と他本の関係」（三七四頁）参照。

（14）藤堂祐範「選択集之書史学的研究」（前掲）、五ウ。

（15）兼岩和広「正中版『選択本願念仏集』」、「法然浄土教の総合的研究」（『仏教大学総合研究所紀要』別冊、2002、二二五頁。なお本論前述の如く、伝正中版など『選択集』の本帖末帖を「本巻」「末巻」と称することは誤りであろう）。

（16）春本龍彬「廬山寺蔵『選択集』と他本の関係」（前掲）、三二五頁。

（17）広本が二箇所で「弥陀」でなく「釈迦」に作ることを、ただの誤りだろうと臆断すべきでない。弥陀の化身である善導の夢中に現れて玄義を指授した僧が弥陀の応現であれば、弥陀の応現が弥陀の化身に玄義を指授したという矛盾が生じてしまう。広本が二箇所で「弥陀」を「釈迦」に改めたのは、この矛盾を避けるためだったと考えられる。

なお、禿庵文庫蔵古写本の当該「弥陀」二箇所に傍記「尺迦」があることは、先行研究で指摘されている。そして、康楽寺旧蔵古刊本（大東急記念文庫現蔵、函架番号「三五・六三・一〇八八」と岩田淳慶旧蔵古刊本（龍谷大学図書館現蔵、請求記号「〇二一・一五一・二」）には「釈迦」などの傍記がより多く見える。今後の研究では、これら古刊本の書き入れにも注意していくべきであろう。

（18）伝正中版の特異な字句の多くは、兼岩和広「正中版『選択本願念仏集』」（前掲）に出校されている。ただし、失校もある。

- (19) 拙稿『選択本願念仏集』と初期浄土宗——形見から初学書、そして付法書へ——、『仏教史学研究』六・一・二、2020、後註二四。
- (20) 伊藤唯真は、二尊院蔵「七箇条制誡」の遵西自筆署名と廬山寺本『選択集』第一筆の筆跡を対照し、「第一筆は安樂房遵西であることは相伝の通りと認められる」と述べている（『選択本願念仏集』、浄土宗出版編『法然上人聚英』、浄土宗・浄土宗宗務庁、2015、三〇四頁）。また、第三筆が証空であることについては、上田良準『選択集』草稿本第三筆は西山上人証空（『西山学報』三二、1984）参照。
- (21) 今岡達音「広本選択集延書」（第一篇第二章第一節、初出1921）、大正大学浄土学研究会編『今岡教授還暦記念論文集』（『浄土学』五・六、1933、二四五頁）。
- (22) 三田全信は、道遍と遵西、金光房が鎌倉で会った時期を正治元年（1199）前後と考証している（住蓮・安樂について）『改訂篇第十章、初出1935』、『浄土宗史の諸研究』改訂増補、山喜房仏書林、1980「初版1959」、二九〇（一頁）。
- (23) 今岡達音「広本選択集延書」（前掲）、二四五頁。

付記 本稿は、科学研究費助成事業（基盤研究C、課題番号「三二K〇〇一一四」）による研究成果の一部である。三宝寺本の書誌情報の引用のため、現蔵者の石川武美記念

図書館から翻刻掲載許可書を取得している。

追記 稿者は過日、遵西についても論じた論文を某誌に投稿した。もし同稿が査読を通過

して年内に刊行されることになれば、その稿末に三宝寺本の巻首書影を掲載したいと考えている。